

# 小谷孝子さん

1939(昭和14)年1月4日生まれ

当時の本籍地 広島県

民間人

広島県広島市



父が海軍だったんです。呉で生まれて5歳の時父が病気で亡くなった。広島市内の父方の祖母の家へ3月に家族で引っ越した。4月に国民学校1年生に入って、その夏に8月の6日に原爆にあっています。

家族構成は、祖母60代、母37歳、姉が5年生、兄3年生、私1年生、弟3歳です。母が働き、食糧も少なくなってきた。広島市内は兵隊さんが多く、陸軍司令部があった。

## ●1945(昭和20)年8月6日

小学校3年生から6年生は学童疎開に行き、空いた学校に兵隊さんが泊まっていた。姉はたまたま8月の6日昼に親戚を頼って疎開することになっていた。午前中お天気もいいし、すぐ裏の川で泳いで来ようと兄弟4人で駆けだした。私が用があって1人で帰った。

それで水を飲んでる時に、ガラス窓がピカーッと光って、家が壊れて下敷きになった。引っ越しの準備をしていた母が2階にいて助けられた。祖母は近所の人と表で立ち話をしている全身火傷、姉も全身火傷。3千度から4千度っていうんですよ。普通100度のお湯でも大やけどするのに。兄は少し後ろを歩いて家の蔭になったから、熱線は浴びなかったが、ガラスが飛んできて頭や顔に刺さって傷だらけ。弟は爆風で飛ばされてなかなか探せなかったけど、母が探してやっと見付けて帰って来た。そういうのは母親ですね。

その頃広島市内は火の海。みんなお化けみたいに皮膚と着てる物が一緒に下がって、ツメの所で皮膚が止まっているんですね。皆痛いから、よく映画ありますでしょ、こうやって手を横にしないで、前に出して。こんなお化けみたいな手になって。そんな男の人か女の人かわからないところから、弟を見つけて母が帰って来て。4日目に弟が亡くなったんです。全身火傷で3歳ですからね。最後の言葉が、母が水を一口のませたら「お母ちゃん」、丁度飛行機がきて見あげてたんですけれどね。「飛行機こわいねえ、水、美味しいねえ」と言って3才で息引き取ったんですけれどね。母はすぐにウジが沸くから弟を自分でリヤカーに乗せて火葬した。瓦礫の上に載せて。皆そうだったんです。母は涙一つ流さないでじっと祈るように見ていました。骨を拾って。親になってわかる どんなに辛かったか。

自宅は焼けてなかったけど潰れてた。近くの小学校に怪我していた人を皆集めていた。だけど薬も水も食べ物も何も無い。ただ死ぬのを待つだけ。家にはポンプの井戸があって、水が沢山出た。母がせめて水だけでも飲ませてやりたいと、倒れている人に私も手伝って飲ませて。人が道端に倒れている。防火用水に皆頭をつっこんで、水が欲しいから、折り重なって亡くなった。あと川に飛び込んで沢山の人が浮かんでる。熱いのと水が飲みたいのでね。

家から出て小学校までぞろぞろと逃げてきた人が、みなそこに入っていた。薬も水もない。そこで死んで行くのを待ってたというか。1人忘れられないのは、血だらけのおじさんが「助けて、助けて」いうんですよ。大工さんで、釘の箱があったんですよ。爆風でその釘が全部体に刺さっちゃって、「抜いてくれ、痛いよ痛いよ」って、次の日くらいに亡くなった。

そこで殆どの方が亡くなっています。学校も壊れてますから、表に沢山すぐに死なない人がいた。亡くなったら兵隊さんがトラックできて積んで川岸に行き燃やす。

もう逃げて来た人が道のところでばたばた倒れて、それをじっと見てたんですけれど、私のそこへ皆寄ってきて、「水頂戴、水頂戴」と手をのばす。もう怖くて、6歳ですからね。立ちすくんでいたという。姉は今日死ぬかという全身火傷で、周りがどんなだったか全然知らないけれども、私だけ6歳だけでも見ていた訳です。

祖母は動けないので、母が薬と食べ物を探して、毎日毎日焼け跡駆け回って、相当放射能をすってる。それでも母は時間つくって因島に渡って孤児の世話をしていた。私1人元気だから、全然構ってくれない母に泣きながら言ったんですよ。他所の子の世話せんと、もっと私の世話してと。そしたら母が、「夜になったらお母ちゃん帰ってくるでしょ 島にいる子ども達はもう何ぼ待っても二度と親は帰ってこないのよ。どんな大変な時でも自分のことだけでなく人の事も考えられる心の豊かな人になりなさい」と教えてくれた。母は6年後に白血病で亡くなりました。

馬の扱いを慣れていて、被爆した馬が暴れて逃げて来る。誰も止められないのを母が止めて、水を飲ませて、落ち着かせて最期を看取る。姉にいわせれば、凄い母だと思います。

(取材日:2018年6月30日)